慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	現代日本語における程度副詞の研究
Sub Title	
Author	宦, 文偉(Kan, Buni)
Publisher	慶應義塾大学日本語・ 日本文化教育センター
Publication year	2017
Jtitle	日本語と日本語教育 No.45 (2017. 3) ,p.107- 107
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大学院文学研究科日本語教育学分野修士論文要旨
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20170300-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』45：107（2017.3）

〔大学院文学研究科修士論文〕

現代日本語における程度副詞の研究

宦　　文　偉

程度副詞は初級段階から導入されている品詞のひとつである。しかし、文の中で必須補語になることの少ない程度副詞は、重点的に説明されることが少ない。上級の日本語学習者でも、十分に使いこなせないことが多い。したがって、現代日本語における程度副詞の体系の整理及び意味的な特徴に関する考察が必要であると思われる。

本論文は 3 章構成であり、現代日本語における各種類の程度副詞の用法・機能を重点的に考察した。各章の概要は以下のようになっている。

第 1 章では、これまでの現代日本語における程度副詞に関する研究を考察の項目ごとに整理した上で、程度副詞の体系及びその特徴を考察した。そして、今までの分類研究を踏まえて、程度副詞を五つの種類に分類した。

第 2 章では、各種類の程度副詞と共起する述語について考察し、どのような述語と共起しうるのか、共起してどのような働きをするのか、という二つの問題を中心に考えた。

第 3 章では、程度副詞の分類に基づいて、各種類の程度副詞の意味的な特徴を考察した。それから、こうした意味的な特徴を基に、統語的な特徴及び構文・叙法における適格性についても考えた。

述語との共起関係に関しては、純粋程度系の副詞は基本的に形容詞だけに係り、その状態・属性の甚だしさを表す。量程度系の副詞（大・小）は純粋程度系の副詞と同じく、形容詞及び形容詞相当の動詞・名詞に係り、その状態・属性の甚だしさを表す。動作性の動詞に係る場合、主体・客体の個体数或いは動きの量を限定する。そして、量系の副詞は基本的に動詞に係り、主体或いは対象の個体数・存在量を表す。最後に、比較系の副詞は形容詞、動詞、名詞のいずれとも共起でき、比較による程度差・量差を表す。

意味的な特徴に関しては、程度副詞には抽象的な程度性と実体的な概念性の二つの側面がある。純粋程度系の副詞は、基本的に抽象的な程度性の側面しか持たない。量程度系・大の副詞及び比較系の副詞には、二つの側面を兼ね備えるものと一側面しか持たないものがある。量程度系・小の副詞は基本的に抽象的な程度性、実体的な概念性の両側面を兼ね備えている。量系の副詞は名詞性が極めて高く、実体的な概念性しか持たない。この実体的な概念性の有無は、程度副詞の統語的な特徴にも影響していることが明らかになった。

最後に、課題としては、副詞の評価性に関する問題である。これに関しては、純粋程度系・量系・比較系の副詞には評価性がなく、量程度系・大、量程度系・小の副詞には評価性があると考えられる。そして、構文・叙法における適格性は評価性の有無に関わっている。ただし、このことはまだ仮説段階であり、今後の課題としたい。